

2025（令和 7）年度 SSH 成果発表会報告

研究部 沼 畑 早 苗

1. はじめに

お茶の水女子附属高等学校（以下、本校）は、2019 年（令和元）年度に文部科学省よりスーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）の指定を受け、2025 年度は第Ⅱ期 2 年目を迎えた。

2025 年度 SSH 成果発表会を 2026 年 3 月 14 日（土）に開催し、全国の教育関係者、近隣中学生、卒業生をはじめとする計 122 名の方々にご参加いただいた。午前の部はお茶の水女子大学講堂（徽音堂）を会場に、2 年生および 3 年生の代表生徒による口頭発表を実施した。生徒が司会・進行を務め、活発な質疑応答も行われた。午後の部は高校体育館にて、2 年生全員および 3 年生有志によるポスター発表を実施した（次頁の図 1～4 参照）。参観された教育関係者や卒業生、SSH 運営指導委員、お茶の水女子大学アドバイザーボードの先生方から様々な質問や助言をいただいた。また、上級生から下級生に対して研究成果を発信するだけでなく、具体的な研究手法やプロセスを伝える場としても機能した。

なお、生徒の課題研究のテーマや内容をまとめた「令和 7 年度生徒研究成果集」は、お茶の水女子大学附属学校園「教材・論文データベース」より閲覧可能である。

参照 URL <https://kyozai-db.fz.ocha.ac.jp/search/detail/1115>

2. 実施概要

(1) 日時： 2026 年 3 月 14 日（土）9 時 20 分～15 時 30 分

(2) 会場： 大学講堂（午前の部）および高校体育館（午後の部）

(3) 参加者：教育関係者（高校・大学教員等）、中学生（附属中学生を含む）

本校卒業生、保護者、運営指導委員、お茶の水女子大学アドバイザーボード、
お茶の水女子大学大学院生 等

(4) 午前の部：口頭発表プログラム

9:00～ 受付開始

9:20～ 開会式、浅田校長挨拶、生徒による司会進行

9:35～11:05 代表生徒による口頭発表（8 件）および質疑応答

①「ハシビロガモの板歯構造～その機能的意義と応用について～」(3 年生)

②「洗濯で落ちる墨汁を作る」(2 年生)

③「リブレット加工によるサボニウス水車の効率化」(2 年生)

④「廃棄繊維の再利用による土系 3D プリンタ建築材料の強度向上」(2 年生)

⑤「育児中の人がサードプレイスに求めるものは何か」(2 年生)

⑥「日本語作品の登場人物を英語で表現する方法

～『坊っちゃん』における役割語の分析を通して～」(2 年生)

⑦「不快音を利用した目覚まし用アラームを開発する」(2 年生)

⑧「二等分線で構成される入れ子多角形の列」(3 年生)

11:05～11:20 閉会式

運営指導委員による講評（横浜市立大学特任教授 松井南先生）

生徒代表挨拶，諸連絡

(5) 午後の部：ポスター発表

12:15～13:30 2年生全員および3年生有志による発表（計 71 ポスターを展示）

(6) 運営指導委員会

13:50～15:30 午後の部の終了後，非公開で実施した。



図1 午前の部，生徒の司会の様子

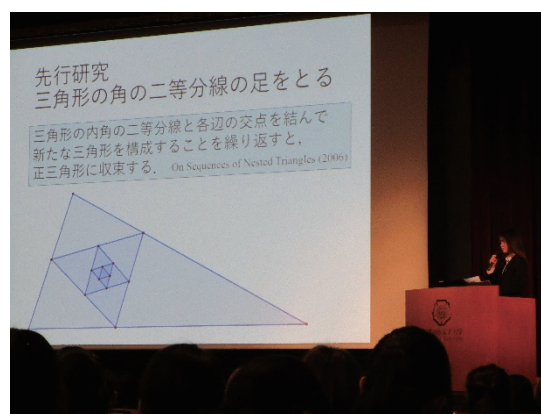


図2 午前の部，口頭発表の様子

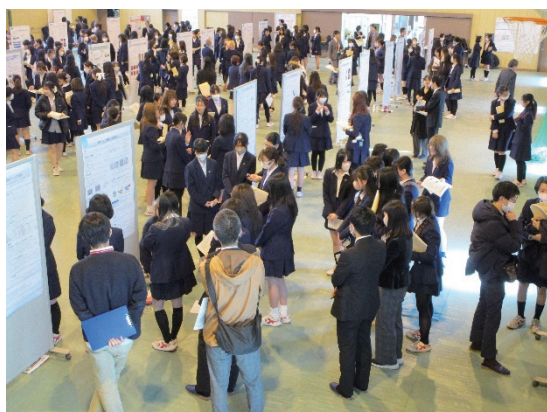


図3 午後の部，ポスター発表の様子

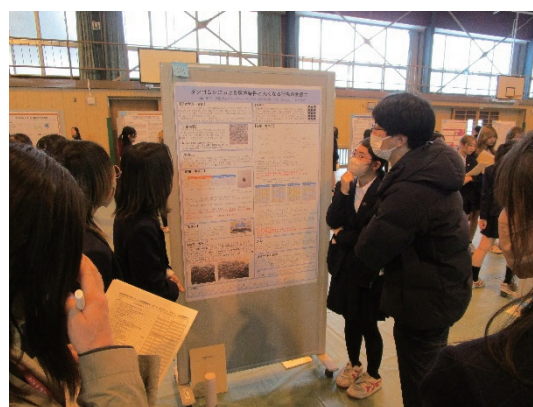


図4 午後の部，ポスター発表の様子

3. おわりに

本発表会における成果について，参加者および生徒の事後アンケートから得られた具体的な意見に基づき，以下の通りまとめる。

外部参加者からは，研究の質と生徒の主体的な姿勢に対して高い評価が得られた。午前の口頭発表については，「発表会に適度な緊張感もあり，選ばれた研究がお手本となるような内容だった」「生徒の熱意と努力を感じられた」といった声が寄せられた。また，運営面についても，「司会進行や準備がしっかりしており，生徒の努力と指導の賜物である」との評価を受け，本校の探究活動が組織的に機能していることが示された。午後のポスター発表についても，「会場での議論がたいへん有意義で，時間が足りないと感じるほどであった」との指摘があり，生徒との双方向のコミュニケーションが活発に行われたことが確認できた。

発表を行った2年生は，発信のプロセスを通じて自身の課題を再認識したことがうかがわれた。具体的には，「視覚的に情報を整理することは，聞き手に伝える上で重要」「単に情報を集めるだけでなく，自分なり

に考察し、どのように伝えるかが大切だと学んだ」といった、表現技術や論理的思考に関する気づきが多く見られた。また、他者との対話についても、「自分には思いつかない視点がたくさんあり、色々な人の意見を取り入れる大切さがわかった」と述べており、客観的な視点を得る機会となったことがわかる。

次年度の課題研究の主役を担う1年生にとっては、具体的な展望を得る貴重な場となった。「来年度からの課題研究Ⅱの解像度が非常に高まった」という意見や、「実験の期間をあらかじめ考えるなど、時間の使い方や計画性が重要だと感じた」といった、実践的な研究マネジメントの必要性を実感する声が目立った。また、「今までに全く興味のなかった分野を面白いと感じ、角度を変えた見方があることを知った」「先輩が自分の興味関心を進んで研究していることが伝わってきて、自分もこんな2年生になれるよう頑張っていきたい」という感想もあり、上級生の多様なアプローチが、下級生の探究心を刺激し、視座を広げる一助となったことがうかがえる。

本成果発表会は、外部からの客観的な評価を得る場となっただけでなく、生徒間での研究手法の伝承や新たな知的好奇心の喚起を促す、本校の探究文化を象徴する有意義な機会となった。